

「黙過」と想像力 ロシア文学との60年を回顧する

10月26日 土 15:45~16:45
(15:15開場)

創価大学中央教育棟 AB102教室



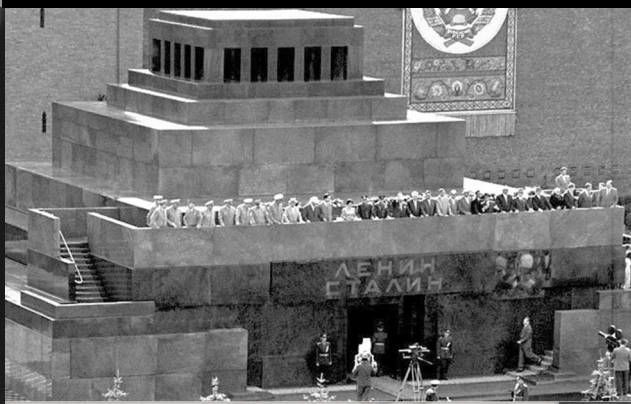
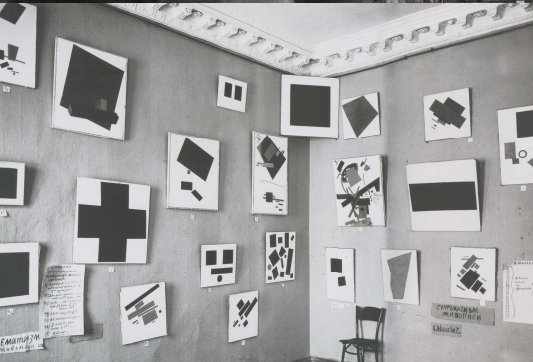
登壇者

亀山郁夫 氏
(名古屋外国語大学学長)

ドストエフスキー『罪と罰』との出会いから60年。ロシア文学・文化研究を推し進めるなかで、一貫して問い続けてきたテーマがある。すなわち、黙過。黙過は、黙って見過ごすことを意味するが、そこには確実に二つの対照的な立場が存在する。すなわち黙過する立場と、黙過される立場。本講演では、大学時代のドストエフスキー経験、詩人フレイブニコフの伝記研究、スターリン時代の文化研究等を通して、何を考え、何を問題としてきたかを、「黙過」をキーワードとしつつ、広く世界の文化との関連も視野に収めながら、考察する。



2024年度ロシア文学会大賞受賞記念講演 「黙過」と想像力 ロシア文学との60年を回顧する



亀山郁夫（かめやま・いくお）略歴



1949年、栃木県生まれ。名古屋外国語大学学長。ロシア文学者。東京外国語大学外国語学部ロシア語学科卒業、東京大学大学院博士課程単位取得退学。世田谷文学館長。日本芸術院会員。2002年に『碟のロシアスターリンと芸術家たち』（岩波書店）で大佛次郎賞、2007年に翻訳『カラマーゾフの兄弟』（光文社古典新訳文庫）で毎日出版文化賞特別賞、プーシキン賞を受賞。2012年には『謎解き「悪霊」』（新潮選書）で読売文学賞を受賞、専門は、ロシア文学・ロシア文化論。著書としては、『甦るフレブニコフ』（晶文社、平凡社ライブラリー）、『ロシア・アヴァンギャルド』（岩波新書）、『破滅のマヤコフスキー』（筑摩書房）、『熱狂とユーフォリア』（平凡社）、『ドストエフスキー 父殺しの文学』（NHK出版）、『ショスタコーヴィチ引き裂かれた栄光』（岩波書店）、『ドストエフスキー 黒の言葉』（集英社新書）、『終末と革命のロシアルネサンス』『大審問官スターリン』『ドストエフスキーとの旅』（いずれも岩波現代文庫）他多数。主な翻訳として、ドストエフスキーの五大長編（『罪と罰』『白痴』『悪霊』『賭博者』『未成年』『カラマーゾフの兄弟』）がある。なお、2015年には、自身初となる小説『新カラマーゾフの兄弟』を刊行した。



創価大学へのアクセス

所在地：東京都八王子市丹木町1-236

- JR八王子駅北口より
西東京バス（所要時間約20分）
ひよどり山トンネル経由／八日町経由
・「創価大正門・東京富士美術館」行き
・「創価大学循環」
- 京王八王子駅より
西東京バス（所要時間約20分）
ひよどり山トンネル経由／八日町経由
・「創価大正門・東京富士美術館」行き
・「創価大学循環」

いずれも もしくは で下車

問合せ

日本ロシア文学会大会実行委員会
taikai_jikko@yaar.jpn.org